世界文学全集45

もう一つの国

ボールドウィン

九つの物語

サリンジャー

集英社

愛蔵版　世界文学全集 *45*

© 1973 Shueisha

もう一つの国

九つの物語

訳者　野崎　孝
　　中川　敏

昭和48年10月31日印刷
昭和48年11月25日発行

編　集　株式会社　綜合社
101 東京都千代田区神田錦町 3-19
電話 東京 (294) 3811
発行者　陶山　巌
発行所　株式会社　集英社
101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-10
電話 東京 (265) 6111　振替 東京 15653
印　刷　凸版印刷株式会社
製　本　中央精版印刷株式会社
有限会社石橋製本工場

落丁・乱丁本はお取りかえいたします
定価はカバーまたは帯に表示されています

0397-116045-3041

目次

ボールドウィン
もう一つの国　野崎　孝訳　3
サリンジャー
九つの物語　中川　敏訳　371
後記　野崎　孝／中川　敏　503
解説　505
年譜　513
著作年譜　523

マンハッタン略図

ハドソン川
ハドソン川
リバサイド・ドライブ
ブロードウェイ
ハイウェイ
ハドソン通り
ハイウェイ
ウエスト・サイド
十二番街
十番街
十一番街
十二番街
四十番街
四十六丁目通り
四十丁目通り
四十一丁目通り
三十四丁目通り
十三丁目通り
十五丁目通り
ペンシルベニア駅
八番街
七番街
十四丁目通り
十一丁目通り
マジンスクエア・ガーデン
ブロードウェイ
エンパイヤ・ステート・ビル
タイムズ・スクエア
カーネギーホール
ロックフェラー・センター
コロンブス・サークル
ブロードウェイ
五十九丁目通り
五十七丁目通り
セントラル・パーク
メトロポリタン美術館
貯水池
八番街
七番街
コロンブス・アヴェニュ
マクドゥガル・ストリート
グレニッチ・ヴィレッジ
西四十丁目通り
ワシントン・スクエア
五番街
マジソン・スクエア
パーク・アヴェニュ
五番街
パーク・アヴェニュ
七十九丁目通り
九十六丁目通り
百十六丁目通り
ウォール街
ニューヨーク証券取引所
警視庁
ユニオン・スクエア
グランド・セントラル駅
二番街
二番街
セント・ジェームズ横町
パワリー街
一番街
ベルヴュ病院
国連本部
セット・ブレース
七丁目通り
八丁目通り
イースト・サイド
ブルックリン橋
ブルックリン
イースト川

0 1000 2000M

グレニッチ・ヴィレッジ

十二丁目通り
五番街
ブロードウェイ
西八丁目通り
東八丁目通り
ウェーバリー・プレース
ワシントン・スクエア
ワシントン・スクエア
西四丁目通り
東四丁目通り
ブロードウェイ
七番街
ユーニオン・ストリート
マクドゥガル・ストリート
ハリー街

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もう一つの国

メアリー・S・ペインターに捧ぐ

彼らからとりわけ強く受ける印象は、彼らが、これまでに人間が使用してきたいかなる言葉によっても、自己を語ってはいないということである。彼らの相寄り相集まった姿は、このことばにはならない状態を示す、いわば前代未聞の記念碑のようなものであろう。彼らが何を考え、何を感じ、何を欲し、何をいっているつもりなのか、それは奈落のように深い神秘である。

ヘンリー・ジェイムズ

第一部　だに

おれはあいつにいったんだ
だにのお世話はごめんだぜ
そこであいつは自力で歩いた
でもその距離は遠くない
――W・C・ハンディ――

第一章

彼は七番街の方を向いてタイムズ・スクエアに立っていた。時刻は真夜中を過ぎていたが、彼は午後の二時から、映画館の二階桟敷のいちばん上の席にすわり続けていたのである。イタリア映画の強烈な音響効果によって二度目をさまされ、映画館の案内係によって一度、股間をまさぐる指の感触によって二度目をさまされたが、なにしろ疲れていたし、堕ちるところまで堕ちた感じの彼には、腹をたてるだけの気力もなかった。自分の身体も自分のもののような気がしない――イチバン良イトコロヲ奪リヤガッタクセニ、残リモ奪ッテイキヤガレ――だが彼は、眠ったままでどなりつけ、黒い顔に白い歯をむき出し、脚を組んだ。やがて二階桟敷もあらかた空になり、イタリアの映画もクライマックスに近づいた。彼はよろよろと果てしなく続く階段をおりて通りに出た。腹がへって、口がねばつく。出口を通り抜けるときに、小便がしたいと思ったが、もう引き返すわけにはいかなかった。それに彼は文なしときてる。おまけに行く所もない。

警官が一瞥を与えて通っていった。ルーファスは方向を変えて、革のジャケットの襟を立てながら、七番街を北に向かって歩きだした。夏のスラックスをとおして、風が小気味よく身にしみる。はじめ彼は、ダウン・タウンへ行ってヴィヴァルドを起そうかと思ったのだ――彼に残されたニュー・ヨークでたったひとりの、いや世界じゅうでたったひとりかもしれない、友だちである――しかし、彼はそのときふと、ジャズ・バー兼ナイト・クラブといったある店を思い出し、そこまで歩いていって、ちょっと覗いてみることにした。だれか知った顔にぶつかるかもしれない。だれか飯をおごってくれるか、せめて地下鉄の切符代くらい恵んでくれるやつがいないものでもあるまい。が、同時に、知った顔にぶつからねばいいが、という気持も動いていた。

華やかな灯もほとんど消えて、七番街は静まりかえっている。たまに女がひとり、あるいは男がひとり通りかかったが、ふたり連れにはめったに会わぬ。街角のドラッグ・ストアに近い街燈の下に白人が何人かかたまって、歯を見せながらしゃべったり小突きあったりしているのがくっきりと浮びあがったが、彼らは口笛を吹いて呼びとめたタクシーに乗って走り去ったり、ドラッグ・ストアのなかに消えたり、横町の暗がりにまぎれていったりした。新聞売店が、盤の上に作られ

た積木の家のように、小さく黒く舗道の一隅を占拠している。警官やタクシーの運転手や、なんとも正体のつきとめかねる男たちが、その前で足をふみならし、なかのおやじのこもった声と、ふたりだけが心得ていることばを交わしてゆく。心の緊張がとけて微笑が消えない、と、チューインガムの広告が宣伝している。星のない夜空に巨大なネオンのホテルの名前が挑みかかる。同じく映画スターの名前、ブロードウェイに目下出演中の、あるいは近く出演予定の人たちの名前。それと並んで高さ一マイルもの大きさに、彼らを不滅の殿堂にまつりあげるだしものの名が光る。灯の消えた巨大なビルが、男のセックスのようにぶく、あるいは槍のように鋭く、眠りを知らぬこの町を守るがごとくにそそり立っている。

その下をルーファスは歩いた。彼もまた堕ちてくずおれた者のひとり——なにしろこの町の重圧はすさまじい——そそり立つビルが倒れるやぐらのように（旧約聖書「イザヤ書」第三十章二十五節）崩れ落ちた日に、それは毎日のことだったけれど、その下敷になって押し潰された、彼もそのひとりなのだ。完全なひとりぼっちで、そのことに死ぬほどの思いをしているくせに、彼にはその実、前代未聞の数にふくれあがった同類がいる。ドラッグ・ストアのカウンターでコーヒーを飲んでいる男や女たちと、いまの彼とを隔てる障壁は、しだいに心細くなってゆく彼らの煙草のように、いつ消え去るかわかったものではないのだ。彼らはその事実を認めることに耐えられない。ルーファスの姿を正視することにも耐えられないだろう。しかし彼らは知っている——なぜ彼が今夜街をうろつくのか、なぜ彼が夜どおし地下鉄に乗り続けるのか、なぜ彼の胃袋がうめくのか、なぜ彼の髪の毛が乱れに乱れ、腋の下が臭い、あまりにも薄っぺらなズボンや靴をはいているのか、なぜ彼が立ち止って放尿する気にもなれずにいるのか——

いよいよジャズ・バーの前にきた彼は、熱気に曇ったドアの前に立ってなかを覗いた。舞台でやっきとなっている黒人のバンドマンたちや、白黒まじってカウンターに群がっているおぼろな人影が見える——というより、気配でそれと察しられるというべきか。音楽が音高く空しく鳴っていた。みんな無意味な演奏をしているばかりで、客に向かって叩きつけられる音楽は、かつては人びとの心底からの憎しみをかきたてた力をいまは失って、歯牙にもかけられなくなった呪詛のことばにも似ていた。バンドマンたちは、だれも聞いていないことを知っているのだ。血の気のない者に血を流さすことはできないことを知っているのだ。そこで彼らは、だれもが前に聞いたことのある曲を吹いて、おそろしいことは何も起らぬと、みんなを安心させてやる。そして、テーブルについた者たちは、この心地よい保証になぶられながら愉快に浮かれ騒ぎ、カウンターに陣取った者たちは、命の盾ともいうべきこの喧騒に身を隠しながら、望むがままのものをあくまで追いかけるのだった。彼はなかにはいってトイレを使いたいと思ったが、その風体では恥ずかしかった。実は一カ月近くも身を隠していたのである。力ない足どりで人ごみをかきわけながらトイレに行き、また匍うようにして外へ出てくる彼の姿を、みんなが、あわれみや軽蔑やからかいの目で見守る

ことであろう。それが彼には目に見えるような気がした。だれかが小声で、ありゃ、ルーファス・スコットじゃないか？とささやくにきまっている。あるいは、恐怖の眼差しで彼を見やったあげく、「ほう！」と、長く引っぱったひとことに深い憐憫をこめながら、また自分のことにもどってゆく者がいるかもしれぬ。そんなことは絶対にできぬ――彼は、片足で交互に身体をゆするようにして小さく跳んだ。涙がにじんできた。

白人のふたり連れが酒場から出て来たが、彼の方などろくに見向きもしないで通り過ぎた。ドアが開いたときに彼の顔を打った熱気、人いきれ、ウィスキーとビールと煙草の匂い、彼はほんとうに泣きそうになった。そして空の胃袋がまたうめきはじめた。

昔が思い出される――昼も夜も、昼も夜も、彼はいつだってなかにはいって、カウンターに陣取り、人群れにまじり、精悍で、好もしくて、ほしい女の子はものにできたし、パーティにも出席できて、浮かれたり酔っ払ったり、バンドマンたちとふざけ歩いたりしたものだったが、彼らは彼の友だちで、彼に敬意を払っていた。それから自分のうちの自分の塒にもどってゆき、部屋のドアに鍵をかけて、靴を脱ぐ。自分で飲物を作るかもしれぬ。ベッドに寝そべってレコードを聞くかもしれぬ。どこかの女の子を電話に呼び出さぬものでもない。下着や靴下やワイシャツも取りかえた。ひげもそったし、シャワーも浴びれば、ハーレムの床屋へも行けた。それから母親や父親に会ったり、妹のアイダをからかったり、食事をしたり――豚のあばらやポーク・チョップや鶏や野菜やもろこしパンや小型食パン。ちょっと彼は空腹のあまり気が遠くなりそうな気がして、ビルのそばに歩み寄ると、壁によりかかった。汗ばんだ額が凍りそうに冷たい。こんなことはやめなければならんぞ、ルーファス――彼はそう思った――こんなばかなまねはやめなければならん。それから、疲れ果て、やけくそになった彼は、路上に人影はなし、だれも酒場から出てこないでくれと願いながら、片手で壁に身をささえると、冷えきった舗道にしぶきを散らして放尿し、かすかに立ちのぼる湯気を見つめていた。

彼はレオナのことを思い出した。というよりむしろ、急にいつもの冷たい息苦しさが胸にあふれて、自分がレオナを思い出していることに気がついたのかもしれぬ。彼は歩きだした。今度はゆっくりと足を運びながら、音楽を離れ、ポケットに両手を突っこみ、頭をうなだれて歩いていった。もう寒さは感じなかった。

というのは、レオナを思い出すことは、同時に――どういうものか――彼の母親の目と父親の怒りと妹の美貌を思い出すことであった。それからハーレムの街々、玄関先の男の子、階段の陰や屋上で抱いた女の子、彼に憎しみというものを教えた白人の警官、路上に展開されるステッキ・ボールの遊び（棒きれをバット代りに使う野球のまねごと）、窓から身を乗り出した女たち、毎日演奏した曲の数々、彼の父親がついに果せなかった成功をかち取ろうと、みんなで演奏したものであった。それからあのジューク・ボックス、性の疼き、ダンス、欲情、徒党を組んでけ

んかもやったし危ない橋も渡った。はじめて手にしたドラムのセット——父親が買ってくれたんだ——はじめて知ったマリハナの味、はじめて飲んだヘロインの味。そうだ。玄関先にくの字形にくずおれて、恍惚と陶酔している男たち、ヤクの盛りすぎから雪の日に屋上で死んだ男の子。それからあのビート。父親はこういったものだ——ニグロは一生ビートに従って生きるんだ。生きるもビート、死ぬるもビート。ほいさ、やるのもビートだわな。赤子のうちからおふくろのあそこでビートに合わせてとんだりはねたり、九カ月たって出てくるときにはタンバリンそっくり。ああ、ビート——手、足、タンバリン、ドラム、ピアノ、笑声、悪態、剃刀の刃。男は身を堅くしながら、笑って、うなって、猫みたいに咽喉を鳴らして。女はしっとりと汗ばんだ身体をやわらげながら、ささやいて、吐息をついて、泣きだして。ああ、ビート——ハーレムでは、夏には、それが目に見えるくらい、舗道の上や屋上でちらちらと震えている。

そして彼は、そうしたハーレムのビートから逃げ出したのだ（そう彼は思っていた）が、それは実は、彼自身の心臓の鼓動にすぎなかった。そして彼は、南部の海軍教育隊にとびこんだ。それから波濤はるかな大洋に乗り出した。

まだ海軍にいた時分に、彼はあるときの航海で、アイダのためにインドの肩掛けを持ってきてやったことがある。イギリスのどこかでふと目にとまったものであった。彼がそれを彼女に与え、彼女がためしにかけてみたその日、彼の体内で、それまでにはついぞ触れられたことのないものが揺れて動いた。そのときまで彼は、黒人に美を見たことがなかったのである。しかし、ハーレムの台所の窓辺に立つアイダを見つめながら、彼女がもはや彼の妹であるばかりでなく、間もなく女になろうとしているひとりの娘であることにいまさらのように気づいたりしているうちに、彼女の姿は肩掛けの色どりや太陽の光彩と結びつき、彼ら兄妹が生み落されたこの島（マンハッタンのこと）の岩よりもはるかに古い、遠い遠い数えきれぬほどの昔に存在した栄光を思い描かせたのだ。その栄光が、いつの日にか、またこの世界に、彼らの知っているこの世界に、出現しないものでもあるまいと彼は思った。遠い遠い昔には、彼女は奴隷の末裔などというものではなかった。絢爛たる肩掛けの影を映してなごやかに陽を受けている彼女の黒い顔を見つめていると、かつてはこれが一個の君主だったことがはっきりと見てとれる。やがて彼は窓の外へ視線を移して、そこの通気孔の壁を眺めた。そして七番街をうろつく売笑婦の群れを考えた。それから、白人の警官たちや、彼らが黒い肌をたねにもうける金のこと、世間全体がかせぎまくる金のことを考えた。

妹に視線をもどすと、彼女は微笑をうかべて彼を見つめていた。すらりとのびた小指には、これもまたいつかの航海に彼が持ってきてやったルビーの眼の蛇の指輪がはまっている。それをいじくりながら彼女はいった。

「いつまでもこんなだといいな。兄さんのおかげであたしは町内きっての衣裳持ちになれるわ」

いまの姿をアイダに見られなくてすむのが幸いだと彼は思

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

った。万一見られでもしたら、彼女はいっただろう――まあ、ルーファス、あんたにはそんなにしてうろつきまわる権利なんかなくってよ。あたしたちにはあんたが頼りだってことがわからないの？

七カ月前――前世のことのような気がする――彼は、ハーレムに新しくできた、ある黒人が所有し経営している店で、バンドに加わってジャズを演奏していたことがある。それは契約が終る最後の夜であった。すてきな夜で、だれも彼もが上機嫌だった。予定の曲目が終ったら、大部分の者は、最近はじめて出演した映画でヒットしたばかりの、ある有名な黒人歌手の家へ押しかけることにしていた。店は、開店早々だったから、満員の盛況であった。最近聞いたところによると、いまではそれほどうまくいっていないという。その夜はあらゆる種類の人びとが集まっていた。白も黒も、高きも低きも、音楽が目的できた人もいれば、ほかの理由で酒場にひたる人もきていた。ミンクのコートも二、三見えたし、ミンクらしいコートもいくつか、それからなんだかわからぬ宝石が、手首に耳に首に髪にたくさんきらめいていた。黒人たちは、理由はともあれ、みんなが自分たちとぴったり結合していることを感じとって気をよくしていたし、白人たちはまた、だれも自分たちを白人扱いしないことに気をよくしていた。店は、ファツ・ウォラー（「グレート・ファツ」といわれた有名なジャズ・ピアニスト、作曲家）の言い草ではないが、まさにハッスルしてたといっていい。

その場の光景には人を酔わせるようなものがあって、彼はいささか陶然となっていた。すごくいい気分だった。そのうえ、最後の番組のとき、夜どおしひときわイカしたサキソフォン吹きがすばらしいソロを聞かせたので、彼の血は二重に湧いた。ルーファスと同じ年格好の青年だった。ジャージー・シティとかシラキュースとか、どこかいかれた町に生れたのであろうが、サキソフォンを吹いているうちに、この楽器で人に語りかけることができることを発見したのだ。彼にはいいたいことがいっぱいあった。彼は両脚を大きく開いて舞台に立って、背をまるめ、巨大な胸をふくらまし、二十何年かの苦闘を偲ばせる身体を震わせながら、サキソフォンを吹いて、愛シテクレルカ？　愛シテクレルカ？　愛シテクレルカ？　愛シテクレルカ？　愛シテクレルカ？――すくなくともルーファスの耳にはそう問いかけているように聞えたのだ。同じことばが、青年の力のかぎりを傾けて、やりきれないまでに、いつまでも、さまざまな色調をたたえてくり返された。静まりかえった聴衆の耳が一点に集中して息苦しい空気が流れた。煙草に火をつける者もなく、卓上のグラスを取りあげる者もない。その場に居合せた人びとの顔には、見る影もなく身を滅ぼした人から沈滞しきった人にいたるまで、ことごとく、ある奇妙な、警戒するような光があらわれた。彼らはそのサキソフォン吹きの攻撃を浴びせられていたのである。彼はもはや彼らの愛を求めていたのではあるまい。サキソフォンにこめたと同じ傲岸な異教の誇りをこめて、彼らに向かい、胸を嚙む侮蔑を投げつけていたにすぎぬ。それにしてもその問

いかけはすさまじく、なまなましかった。彼は、胸いっぱい、腹いっぱいに、その長からぬ過去の思いを吹いていた。その過去のどこか、どん底の暮しのなかや、徒党を組んでやったけんかやいたずらのなかで、あるいは、すこしのゆとりもなかった家のなかや、精液でこわばった毛布の上や、マリハナやヤクの陰や、アパートの地下室の小便の臭いの下で、彼はけっして癒えることのない打撃を与えられたのだ。そしてそのことをだれもが信じたくなかったのだ。愛シテクレルカ？　愛シテクレルカ？　愛シテクレルカ？　舞台の男たちは、そのまま舞台にあって、すこし離れたところにすましかえって立ったまま、それに和して同じ質問を投げつけながらその裏書きを続けるとともに、皮肉な自己嘲弄の色をうかべて、できるかぎり、それに水をさすまねをやっていた。しかし、彼らは、そのサキソフォン吹きが、彼らひとりひとりに代って吹いていることをそれぞれに承知していた。その舞台が終ったときには、みんながぐっしょりだった。ルーファスには自分やまわりの男たちの身体の臭いが臭った。「さあ、終った」と、ベース・マンがいった。聴衆はアンコールを要求して叫んだが、彼らは彼らのテーマ・ソングを演奏して、明りがついた。こうして彼が最後に参加したジャズ・バンドの最後の舞台は終ったのである。

彼は、月曜の午後まで、そこの舞台には出演しないつもりだった。そして彼が舞台をおりたときに、そこにそのブロンドの女が立っていたのだ。非常に地味な服を着て彼を見つめていた。

「なに考えてんだい、きみ」と、彼はいった。まわりの者はみんな忙しげにパーティに出かける準備をしている。時は春で、あたりの空気には生気が脈動していた。

「あんたこそ、なに考えてんの？」そう彼女はいい返してきたが、それはほかにいうべきことが思いつかぬままに出たことばであることは明らかだった。

そのことばでじゅうぶんだった。彼女は南部の出身だった。いかにも南部の貧窮白人を思わせる面輪の、汗ばんだ青白いその顔や、淡い色のくせのない髪の毛を見つめているうちに、ルーファスの体内で何かがピクリと動いた。彼よりもかなり年上である。三十は越しているだろう。それに身体が細すぎる。それでもやはり、こんなに蠱惑的な肉体は長いこと見たことがないという実感がいきなり胸にきた。

「カワイコちゃん」と、彼はいって、ゆがんだ笑いをうかべた。「きみの家はずっと遠くなんだろう？」

「そうよ。あそこへはもう帰らないんだ」

彼は笑った。彼女も笑った。「じゃあね、ミス・アン」彼はいった「きみもぼくと同じことを考えてるらしいからさ、いっしょにあのパーティへ行こうじゃないか」

そういって彼は、彼女の腕をとり、わざと手の甲が彼女の乳房に触れるがままにまかせながら、「きみの名前、ほんとはアンじゃないよな？」

「ええ、レオナっていうの」

「レオナ？」そういって彼はまた微笑した。彼の微笑は非常に効果的なのである。「いい名前だね」

「あんたは？」
「おれ？　おれはルーファス・スコット」
　この女はハーレムなんかのこんな店で何をしてるんだろう、彼はそう思った。ジャズに興味をもつようなタイプにはてんで見えないし、知らないバーにひとりで行きつけているような女にはなおさら見えぬ。薄手のスプリング・コートを着て、長い髪はうしろにかいてピンで簡単にとめてあるだけ、ルージュもほんのすこししかさしてないうえに、ほかには化粧らしい化粧がぜんぜんない。
「さあ、タクシーに乗ろうよ」
「あたしが行ってもいいのね？」
　彼は唾を飲んだ。「よくなきゃ誘ったりするもんか。ぼくがいいといったら、いいんだ」
「そう」彼女は短く笑っていった「じゃあ、いいわ」
　ふたりは人ごみにまじって動いていった。その流れは、何度もつかえながらも、さかんにしゃべり、笑い、煽情的な混乱をまき起しながら、表の通りへ吐き出されていった。時刻は明け方の三時で、彼らのまわりいちめんに散らばっていた華やかな人びとは、衣裳を光らせながら口笛を吹いてタクシーを片っ端から占領していった。そのほかの、いちだんと華やかさの劣る連中は――そこは百二十五丁目の西の端であった（百二十五丁目はハーレムのまん中を東西に横断する大通り）――道のあちこちにかたまって立っていたが、ある者は足早に、ある者は傲然と、ある者はぶらぶらと歩きながら、通りすがりに、好奇の目というよりは心得たような視線を、あるいは横からあるいは真正面から、彼らに浴びせて去っていった。ゆっくりと警官が近づいてきた。そして、ここにいる黒人たちは、時刻はおそく多くは酒に酔ってもいるけれど、いつものように扱ってはならぬ連中であり、いっしょの白人たちも同様であることを自分たちが心得ている旨を、慎重に、むしろ暗々のうちに、たくみに匂わせながら、通り過ぎていった。だが、ルーファスは、ふと、まもなく白人はレオナひとりになりそうな気配に気がついた。そう思うと彼は不安になり、不安になったことがまた腹立たしかった。レオナは空のタクシーを認めて大きな声で呼んだ。
　運転手は白人だったが、車を止めるのになんのためらいも見せなかったようだ。また止ってからも、止めたことを悔やむ色はさらさら示さなかったようだ。
「明日は仕事に出るんじゃないのかい？」彼はレオナにきいた。ふたりきりになったいまになって、いささか気おくれが感じられる。
「ううん。明日は日曜よ」と、彼女はいった。
「そうだっけ」彼は急に気が晴れてうれしくなった。彼は家族の者を訪ねるつもりにしていたのだが、一日じゅうレオナを抱いて寝ていたら、どんなにすばらしいかと思った。彼女を眺めやると、たしかに小柄ではあるけれど、均斉のとれたいい身体をしている。何を考えているのであろう？　彼は、ちょっと彼女の手に自分の手を重ねながら、煙草をすすめたが、彼女は辞退した。「きみ、吸わないの？」
「たまにね。お酒を飲むときなんか」
「それがちょいちょいなんだな？」

彼女は笑った。「ううん。ひとりで飲むのはきらい」
「しかしねえ」と彼はいった「これからはひとりで飲むことなんか当分ないよ」
それに対して彼女はなんともいわなかった。が、身をこわばらせて顔を赤らめたらしいのが、暗いなかでも感じられた。彼女は自分の横の窓から外を眺めている。「今夜早目にきみを家まで送り届ける心配をしなくてすむのはありがたい」
「その心配ならご無用よ、ゼンゼン。あたしはおとなですもん」
「カワイコちゃん。きみはまだ生れて一分のネンネだぜ」と、彼はいった。
彼女は溜息をついた。「ときには一分がすごく大事なことがあんのよ」
それはどんな意味か、きくのはよそうと彼は思った。そして深刻な表情をして「それはそうだ」と、いったが、彼女には彼のいう意味がのみこめなかったらしい。
車はリバサイド・ドライブにはいり、目的地が近づいてきた。左手には、ほの白く薄ぎたない灯が点々と見えて、ジャージーの岸辺の黒さがひときわきわだって映る。彼は、レオナにすこしもたれるようにしてうしろのシートによりかかりながら流れ去る対岸のシルエットと灯影を見つめていた。やがて車は角を曲った。そのとき、遠く、何か空に書いてでもあるようにきらめく大橋（イルミネーションを施したジョージ・ワシントン橋）の姿がちらりと見えた。車はハウス・ナンバーを探しながらスピードを落した。前方に止ったタクシーが一団の客をおろしたかと思うと、そのまま走り去って姿を消した。「さあ着いた」と、ルーファスはいった。「なかなかすてきなパーティらしいですな」運転手はそういって片目をつぶった。ルーファスはそれには答えず、金を払った。そしてレオナといっしょに車をおりてロビーにはいった。鏡や椅子があって、大きな、けばけばしいロビーである。エレベーターはちょうどあがりはじめたところで、彼らの前で車をおりた人たちの声が聞えた。
「レオナ、さっきはあんなクラブにひとりぼっちで何をしてたんだい？」ルーファスがいった。
彼女はちょっとびっくりしたような顔をして彼の方を振り向いた。「さあねえ。ただ、ハーレムってとこが見たかっただけ。それで今晩、見物に出かけたのよ。そして、あのクラブの前を通りかかったら音楽が聞えた。それでなかにはいって、そのままあそこにいたってわけ。あの音楽、よかったわよ」そういって彼にからかうような表情を向けながら「これで答えになって？」
彼は笑って答えなかった。
上でエレベーターのドアのしまる音がしたので、彼女はそちらに顔を向けた。ついで、それが下におりはじめたうなりが聞えてきた。彼女は目の前のとざされたドアを、自分の運命を左右する物でも見るように、凝然と見つめていた。
「ニュー・ヨークは今度がはじめて？」
彼女はそうだと答えた。しかし、昔からいつも夢に描いていたのだという――また半ば彼の方に向けた顔に、かすかな微笑がうかんでいる。彼女の態度には、なにかためらうよう

なところがあって、それが彼にはひどく魅惑的に感じられた。さしのべられた手に近寄ったものか、逃げ去ったものかをきめかねて、こわごわ近づいてきては、またパッと逃げ出しながら、いつまでもそれをくり返している野生の動物、そんな感じだった。

「おれはここの生れなんだ」彼は彼女を見守りながらそういった。

「わかってる」と、彼女はいった「だから、あたしみたいな感激がないのね」

彼はまた笑った。不意に彼は、南部の海軍教育隊にいたころのことを思い出した。するとまた、彼の口もとを蹴りつけた白人将校の靴の感触が蘇った。彼は、白い軍服を着て、埃っぽい赤土の上に顔を押しつけるようにして倒れていた。黒人の仲間が何人か、彼をささえながら、耳もとで大きな声で叫んで、彼を助け起そうとした。白人の将校は、罵倒のことばを吐きすてると、そのまま姿を消してしまった。復讐の手の届かぬかなたへ永久に去ってしまった。彼の顔には、土と涙と血が、いっぱいこびりついていた。彼は赤い土埃のなかに赤い血の唾を吐いた。

エレベーターが止ってドアが開いた。彼は彼女の腕をとってなかにはいると、そのままそれを胸に抱きしめていた。

「きみはほんとうにかわいい女だな」

「あんただってやさしいわ」彼女はそういった。あがってゆくエレベーターの密室のなかで、そういう彼女の声には、意外な震えがにじんでいた。それから彼女の身体もまた、外のやわらかい春風に弄ばれているかのように、きわめてかすかながらも震えていた。

彼は彼女の腕を抱いた手に力を入れた。「うちの人たちから、北部へ行ったらクロンボに用心しろって、そういわれたんだろう？」

彼女は息をのんだ。「まだ一度も黒人からいやな目に会わされたことなんかないわ。あたしにとっては、人間はだれでも人間よ」

そしておれにとっては、セックスはどれでもセックスだ、と彼は思った――しかし、やはり、彼女のその口ぶりはうれしかった。おかげでいまの自分の立場を確かめることができた。だって、彼もまた、かすかに震えていたのである。

「なんできみはまた北部へなんかきたのかね？」と彼はいった。

自分のほうからもちかけるべきなのだろうか、それとも彼女のほうがもちかけてくるのを待つべきなのだろうか？　こっちから頼むなんて、できることではない。でも彼女のほうからならできるんじゃないか？　股間の毛がかすかにむずかゆくなってきた。下腹部のおそろしい筋肉が熱をもって堅くなってくる。

エレベーターが止った。ドアが開いた。ふたりは長い廊下を通って半開きになった戸口の方へ歩いていった。

「向うであたし、死ぬほどつらい目にあったの」と彼女はいった「結婚したんだけど、そのうちに、主人と別れたら、子供まで取りあげられちゃった――顔も見せてくれやしない

――それであたし考えたのよ、こんなとこにすわりこんでたら気がどうにかなっちまう、いっそのこと北部へ行って、ひとりで新規まきなおしにやってみようって」

とたんに想像力が刺激されて、彼は考えた――レオナも一個の人間だ、いわくをもったひとりの女、いわく因縁はすべて厄介のもとだ。しかし彼はその考えを払いすてた。彼女の因縁に悩まされるほど長くつき合うつもりはない。今夜一晩彼女がほしいだけなんだ。

彼はドアをノックすると、返事を待たずになかにはいった。まっすぐ前方に大きな居間があり、その向う端の両開きのドアがあけ放されて、そのまま露台に出られるようになっていたが、その居間のなかを、百人を越える人びとが、イーヴニング・ドレスとか、スラックスにスウェーターとか、思い思いの服装で動きまわっている。頭上高く大きな銀の球がさがっていて、これに部屋のなかの思いがけないところが写り、それが期せずしてその場の人びとの意地悪い批評になっていた。行ったりきたりする人の動きで部屋はにぎわい、宝石やグラスや煙草が華やかな色どりを添えて、天井の大きな球までが息づいているように見える。

主人役――それを彼は実はよく知らないのだが――その姿がどこにも見あたらない。右手に三つほど部屋があって、とっつきの部屋に肩掛けや外套がうずたかく積まれてあった。

ハイ・ファイで再現されたチャーリー・パーカー（天才的なサキソフォーン奏者）のサックスが人声を圧して高く響きわたる。

「コートを脱いだら？」彼はレオナにいった「だれか知った顔がいるかどうか探してみよう」

「あら」と彼女はいった「みんな知った人たちばかりじゃないの？」

「さあ、行こうよ」笑いながら彼はいって、やさしく彼女を押しながら部屋にはいった。「おれがいうとおりにやればいいんだ」

彼女がコートを脱ぎ――それから、おそらく、鼻の頭を叩きもしたであろう――その間に、彼はヴィヴァルドに電話をかける約束があったことを思い出した。彼は、なるべく人目につかない電話を探しながら、あちこちくまなく歩きまわった末に、台所でそれを見つけた。

彼はヴィヴァルドの電話番号をまわした。

「おい。元気か？」

「うん、元気だ、ろうな。どうしたんだ？　もっと前に電話をくれると思ってたのに。あきらめかけてたとこだ」

「実はいまきたばかしなんだ」そこへふたり連れがはいってきたので彼は声を落した。ダッチ・ボブの崩れたブロンドの女と背の高い黒人である。流しに背をもたせかけた女の前に立って、男は女の腿の外側にゆっくり手をすべらせる。ふたりともルーファスには目もくれない。「お上品なオキドリさんがいっぱいいやがんだよ。察してくれ」

「うん」と、ヴィヴァルドがいった。ちょっと間があって「そっちへ行くだけの値打があるかね？」

「そうさなあ、わからんな。おまえの方にもっとましなことがあるんだったら――」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com